



Newspaper in Education

NIEニュース

エヌ・アイ・イー

第95号
2020.2.15

●特集・家庭で取り組むNIE▶1~3 ●第10回「いっしょに読もう！新聞コンクール」表彰式▶4~5 ●新聞の「今」——米国で広がる「課題解決型報道」▶6 ●アドバイザー紹介/フラッシュニュース▶7 ●〈NIEでいきいき〉〈NIEあれこれ〉▶8

©2020年 日本新聞協会

編集・発行 一般社団法人 日本新聞協会 TEL: 03-3591-4410 (NIE担当) FAX: 03-3592-6577 e-mail: nie@pressnet.or.jp
〒100-8543 東京都千代田区内幸町 2-2-1 日本プレスセンタービル [https://nie.jp] [https://www.facebook.com/Nie47]

特集

家庭で取り組むNIE

子どもたちが日常的に新聞に触れ、親しむためには、学校だけでなく家庭でも新聞を読む習慣をつけることが重要だ。新聞を通して世の中の出来事を知り、気になった記事について家族で対話することで、子どもたちの知識が広がり、社会への理解も深まる。さらに親子の会話が生まれ、親が改めて新聞の良さに気付くことも期待できる。家庭を進めるNIEについて寄稿いただいた。

NIEという学校教育だけを考えがちだが、家庭教育で新聞を生かしていくことも重要なNIEである。

家庭でのNIEは0歳から開始

家庭でのNIEは何歳くらいから始められるかと質問されることがある。私は「0歳から始める」と答えている。もちろん0歳では文字も読めないし新聞とは何かさえ分からない。しかし、小さいときから親や家族が当たり前のよう新聞を読んでいる姿を見せること自体に意味



秋田大学大学院
教育学研究科特別教授
秋田県NIE推進協議会会長

阿部 昇

がある。子どもは、意外なくらい親や家族が新聞を読んでいる姿をしっかりと見ている。「何をそんなに熱心に見ているの」と感じるようになる。

新聞は大切な家庭文化である。子どもは、家庭の中で親や家族が新聞を読んでいる姿を見るところから家庭文化を学ぶ。物心がつくと、自然と新聞に興味をもつようになる。

家族が紙面をタイムリーに見せる

写真や文字が分かるようになったら、親や家族が紙面で「これは！」と思うものを子どもにも紹介する。写真自体が面白い場合がある。「この風景すてき」「このサッカーゴールの瞬間、すごいと思わない？」と写真を

紹介する。文字が分かるようになったら「この記事、意外な練習法を紹介してるよ」「なんてこんなことができるのかな。すごいね」などと話題にする。

新聞記事には、見出しや本文だけでなく、写真や図表、イラストなどさまざまな要素が含まれる。ジャンルとしても広告や漫画など多様である。それが子どもの関心にヒットする。もちろんテレビ欄も使える。

ただし、「これは！」と思っただけでも意外に反応が薄い場合がある。そのときに怒ったりがっかりしてはいけない。気にせず機会を見てまた紹介する。

スクラップや2紙の読み比べにも挑戦

「いろいろな昆虫」「サッカー面白記事」などテーマを決め、親子でスクラップをするのも楽しい。スクラップブックを作り、感想や気になったことを親子で書き入れる。できれば学校の担

任の先生にそれを見てもらい、コメントをもらう。もちろんたくさんほめてもらう。子どもは一層やる気を増す。

学校の学習と関わらせるスクラップも面白い。「歴史スクラップ」「料理レシピスクラップ」などである。これも担任の先生の評価があると効果的である。

さらに攻めのNIEとしては、同じ出来事の2社の記事の読み比べがある。継続的に2紙を購入することは難しいかもしれないが、気になった記事があったときは、家庭で購読している以外の新聞をコンビニなどで購入する。そして、記事の書き方を比べて親子で感想を出し合う。

全国紙と全国紙、地方紙と全国紙など2紙を比べると、意外なくらい面白い違いを発見できる。まず見出しが新聞によって大きく違う。写真の読み比べも楽しい。初めはそこまで十分である。慣れてきてリードの読み比べ、本文の読み比べへと進んでいくと、また新しい発見がある。さらに3紙の読み比べに発展しても良いのである。

親子で取り組む校長からの宿題



国分寺市立
第五小学校 校長
竹泉 稔

「校長先生、『かわせみの宿題』のコメント、ありがとうございます。子供がそれを楽しみに新聞を読んでいます」

国分寺市が実施する史跡駅伝会場で、保護者から声をかけられた。「かわせみの宿題」（かわせみⅡ国分寺市の鳥）とは、2018年度の途中から月1回程度で始めた、校長の出す宿題のことである。

本校では、私が着任した18年度から新聞を授業等で活用している。19年度からは全校で月1回、NIEタイムを朝学習で実施している。新聞を購読する家庭が減っている現在、学校で新聞を読む機会をつくる必要がある。児童が使う新聞代は毎月、保護者から集金している。

日本新聞協会主催の「いっし

よに読もう！新聞コンクール」には、夏休みの宿題として全校で応募し、保護者にも協力を呼びかけている。2年間で3人が優秀賞を受賞し、少しずつではあるが、新聞を活用することの意味や楽しさを児童も保護者も感じるようになってきている。

「かわせみの宿題」で使用する記事は、一般紙と子供新聞3紙から選んでいる。表面には記事とその記事に関する問題を載せている。記事の内容を理解できれば答えることができるように、穴埋めや簡単な記述式にしている。裏面は、「いっしよに読もう！新聞コンクール」の書きを活用している。希望する児童だけの課題だが、学年や学級によつてはかなりの人数の児童が取り組んでいる。①記事を読んで自分の思いや考えを書く、②家族や友達に同じ記事を読んでもらい、意見を聞き取り、記入する、③家族や友達と話し合い、広げたり深めたりした意見を

を書く——。これを継続することで、児童と家族との話題が広がり、新聞を通して親子の交流が図られている。「親子で宿題に取り組み、新聞の良さを改めて実感しました。身近な問題を家族で考えることはとても有意義なことでした」と保護者の声が寄せられた。

「ファミリーフォーカス」で伸びる力



福井市
宝永小学校 教諭
岡崎 英美子

本校では、10年前から「ファミリーフォーカス」と名付けたワークシートを用いた活動に取り組んでいる。

きっかけは、NIE実践指定校になり、2010年度のNIE全国大会（熊本大会）に参加したことである。その際にいわ

つことができること、②保護者にも考えてもらいたいこと、③話し合ったことが行動に結び付くこと、④伝えたい内容が明確で、児童でも理解できること、⑤児童が学校で話題にできること——。月1回程度の宿題ではあるが、積み重ねていくことで新聞を読み、考え、記述する力は確実に向上している。

「かわせみの宿題」には、校長が丸付けをし、コメントを書ける「ファミリーフォーカス」と呼ばれる、家庭でのNIEの実践を知り、「家族とともに取り組み、無理なく続けられそう」だ。「新聞に親しみ、読み取る力をつけるために有効ではないか」と考え、取り入れることにした。

本校では毎月24日を「新聞の日」と定めており、その日までの課題として「ファミリーフォーカス」に取り組んでいる。児童は、①新聞記事の中から

いてから児童に返却している。3学期が始まり、児童から「『かわせみの宿題』またやりますか」と、聞かれたので、「また出すよ」と答えた。どんな反応が返ってくるかと思ったが、児童はうれしそうに「やったあー」と、笑顔で応えてくれた。楽しみにしている児童が増えるように、これからも親子で考え、楽しめる「かわせみの宿題」を出していこうと思う。

気になった記事を切り抜き、ワークシート「ファミリーフォーカス」に貼り付ける、②内容を簡単に要約して記入し、感想を書いてまとめる、③保護者も同じ記事についての感想を記入す



掲示されたワークシートを読む児童

特集 家庭で取り組む NIE

る——といった手順で取り組み、提出する。ワークシートは、各学級で紹介し合ったり、各学年の掲示板に掲示し、いつでも誰でも読むことができるようにしたりしている。掲示しておく、友達や他の学年の児童が見つけた記事を、立ち止まって読む姿が見られる。「同じ記事でもいろいろな捉え方があるのだ」と

子育て世代に新聞を



北海道新聞社
NIE推進センター委員
渡辺 多美江

「新聞っていろんなことが書いてあって面白い。うちに帰ったら、新聞とってもらおう」。北海道新聞社のNIE推進センターの一員として、中学・高校生向けの職業体験プログラムを担当していると、たまに生徒からこんな感想をもらう。新聞の魅力発見の瞬間に立ち会い、大変うれしい。が、裏を返せば子育て

考えを深める児童もいる。掲示してあるものを見ると、どの家庭も熱心に取り組んでくれている様子がかがえる。

委員会活動として、文化委員会が週3回、校内放送でワークシートの紹介も行っている。文化委員会の児童がワークシートを選んで、①書いた人の学年・クラス・氏名、②記事の見出し

て世代の新聞離れの表れだ。

小中高校への出前授業、教員養成課程の大学でのNIE講座でも、私たちは「新聞を知らない」ことを前提にメニューを組む。ところが、それは新聞の力を再確認する場でもある。

新聞を知らない子が、授業で手にするとやがてマンガやスポーツ、時事問題などそれぞれの関心事を見つけて熱中していく。さらに記事を使った授業や新聞づくりなどを通して意見交流を行い、好奇心や思考力が高まっていく。

と内容、③選んだ人の感想と自分の感想——を、テレビ画面にワークシートを映しながら伝えられている。放送を視聴していると「あ、この記事知ってる」「へえ。知らなかったな」とつぶやいている児童もいて、興味をもって聞いている様子である。児童に朝の話題で、「気になった出来事は何ですか」と問いかけると、

こうした子供たちの姿を、新聞を読んでいるいない保護者と共有できないのが、つくづくもったいない。そもそも「学校だけでなく家庭や地域と連携するNIE」が重要だと思う。しかしスマホの影響なのか、新聞・テレビが大々的に報道する他県での台風被害を知らない大学生もいる時代だ。新聞に限らずさまざまなメディアの危機ではないか。

一方で、社の事業を通じて、子育て世代と新聞の幸福な出会いを実感する場が多々ある。2018年度に始めた中学・高校生対象の「新聞切り抜きコンテスト」は、初回から素晴らしい作品が集まり、19年度の2

スポーツの試合結果、国際問題、芸能ニュースなど、それぞれ自分が興味をもった出来事を次々と挙げてくる。また、休み時間に図書室に置いてある新聞を読んでいる児童もよく見かける。本実践により、新聞を読む機会が増え、社会的事象への興味関心が広がったのではないかと考える。そして、この活動を通

回目は一千点以上の応募があった。優秀賞に選ばれた生徒たち取材すると、特に中学生から「記事を切り抜くために家に新聞を買ってくれた」「重い通学かばん問題」の切り抜きを見ながら、お母さんといういろいろな話した」などの言葉を聞く。そこに浮かぶ家庭の光景は、まさに「主体的・対話的で深い学び」

「多様な情報から選取り、発信する力」など新学習指導要領が掲げるキーワードと重なる。25回を数え、応募が一万点を超える新聞コンクール「どうしん私とほくの小学生新聞グランプリ」も、取材先への送迎付き添いや製作過程での激励な

して児童の「読む力」「まとめる力」「考える力」が確実に伸びていると分析する。

最後に、10年間にわたり「ファミリーフォーカス」の取り組みを続けることができたのは、教員のみならず、保護者の理解・協力があつたからこそ受け止めている。今後も、家庭と連携しながら進めていきたい。

ど、家庭の後押しの様子が作品の「編集後記」などから伝わる。家族は、「新聞づくり」によって子供の多様な成長の姿を目の当たりにしている。

子育て世代との幸福な出会いがあれば、新聞は子供の成長にとって重要なアイテムの一つになる余地が十分ある。子供の反応で保護者は気付く。私たちはそのお手伝いをしたい。

2021年8月、日本新聞協会主催のNIE全国大会が札幌市で開催される。教育や新聞関係者のほか、保護者の方にも「子育てには新聞だよ」と思ってもらえる出会いが生まれたら、と準備に励んでいる。

第10回

いっしょに読もう！新聞コンクール表彰式

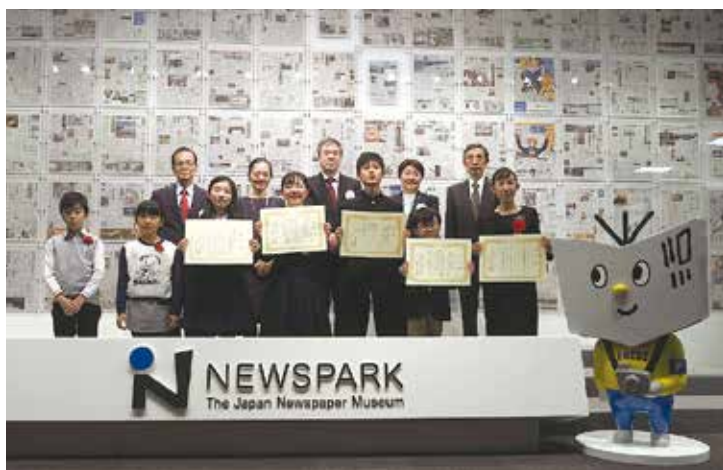
第10回「いっしょに読もう！新聞コンクール」の表彰式が2019年12月14日、横浜市のニュースパークで開かれ、小・中・高校（高専）各部門の最優秀賞、審査員特別賞の受賞者に賞状と盾が贈られた。受賞者はそれぞれが選んだ記事を執筆した記者と懇談し、記事に込められた思いに触れた。また、優秀学校賞を代表して宇都宮市立豊郷中央小学校の担当者を招き、贈賞した。

式の冒頭、新聞協会NIE委員会（毎日東京）が「今の世の中は、答えない問題が数多くある。自分の力で考えるために必要なのが

新聞だ。新聞を読んでいろいろな課題を見つけ、より良い社会をつくるために力を貸してほしい」とあいさつした。今回の表彰式には、文部科学

が必要で、そのためには多様な角度から物事を見つめ直し、他者と交流して別の見方に気付くことが重要だ。新聞で視野を広げ、人生をすばらしいものにしてほしい」と祝辞を述べた。

小原友行審査委員長（前日本NIE学会長、福山大学教授）は、「受賞者の皆さんは、他者との対話で考えを交流することにとどまらず、家族や地域、世界をより良くするためにどうすれば良いのかと考えをめぐらせ、深めていた。世の中にある苦しさや悲しさも希望に変える『物語』を作り出そうとしていた。新聞をきっかけに、新たな希望の物語が私たちの生活や社会、世界や地球を変えていく力になる。今日はその可能性を感じた」と講評した。



最優秀賞・審査員特別賞受賞者と優秀学校賞代表者ら

省初等中等教育局の大滝一登視学官、全国学校図書館協議会の竹村和子常務理事・事務局長が来賓として出席。大滝視学官は、「新聞に親しみ、記事を読んで考えることで表現する力が育つ。現代社会の変化は激しく、将来を予測することは困難だ。そんな社会をたくましく、しなやかに生き抜くには人生を切り開く力

今回は47都道府県と海外から作品が寄せられ、応募数は計5万7561編（小学生6605編、中学生2万5402編、高校・高等専門学校生2万555

4編）に達した。1次、2次、最終審査会を経て、小・中・高校生部門の最優秀賞を各1編、審査員特別賞を1編、優秀賞を校種別に各10編、奨励賞を計118編選んだ。また、団体応募441校の中から、優秀学校賞を小・中・高校各5校の計15校、学校奨励賞を182校選んだ。

対話から生まれた「物語」

福岡県粕屋町立粕屋中央小学校5年の清武琳さん（小学生部門・最優秀賞）は、新聞記事から病院の医療チームの一員として働くファシリテイドッグの存在を知った。脊柱側弯症を患い手術や入院を繰り返す清武さんは、自分が入院する病院への導入を目指し、手紙を送るなどの行動を起こした。清武さん



清武さんと宇多川記者

元紙の存在を知り、心を動かされた。上坂さんは記事について、「人と人とのつながりが薄くなっている現代で、地元紙を使って恩人を探そうとした高校生の行為に感動した」

は「今後、もっといろいろな人にファシリテイドッグのことを知ってもらいたい」と決意を述べた。記事を執筆した毎日新聞東京本社統合デジタル取材センターの宇多川はるか記者は、「清武さんが選んだ記事は、毎日新聞本紙に掲載された記事を分かりやすくして小学生新聞に載せたもの。ファシリテイドッグを必要とする当事者が読み、感想を寄せてくれるとは想像していなかった」と語った。中学生部門の最優秀賞を受賞した上坂大空さん（富山県高岡市立高岡西部中学校3年）は、困っている高校生に手を差し伸べる大人が存在すること、恩人に感謝の気持ちを伝えるべく行動する高校生、それを助ける地

と話した。これに対し、共同通信社那覇支局の富田ともみ記者は、「読者の心に感動を与えられる記者になりたいと思っています。上坂さんにその思いが届いてうれしかった」と感謝した。

遠藤はなさん（大分県立大分舞鶴高等学校2年）は、出生前診断に関する論説記事をもとに、両親と話し合った。父親と母親で意見は異なっていたが、共通点を見いだし、出産するなら、何があるかと生まれてくる子を幸せにする覚悟を持つべきと考えた。遠藤さんは記事との出会いについて、「以前から『何を幸せとするか』について考えていた中で、偶然、見出しが目に入り、読んでみた」と振り返った。共同通信社の吉本明美科学部編集委員は、「短い記事を



笑顔の上坂さんと富田記者

きっかけに、出生前診断という重い問題について考え、希望の『物語』を作り出している」と称賛した。

今回は、高校生部門で最優秀賞にも匹敵すると高く評価された影浦響子さん（神奈川県立横須賀高等学校2年）に審査員特別賞を贈賞した。京都アニメーション放火事件での被害者の実名発表に関する記事をもとに母親と対話した影浦さんは、取材を望む遺族の存在に思いが至り、物事を考える際に多角的な視点を持つ必要があることに気付いた。影浦さんは実名公表の問題について、「インターネットの普及



吉本編集委員に笑顔で語る遠藤さん

により、誰もが容易に意見を発信できる時代だ。今後と同様の議論が生じるのではないか」との考えを述べた。

産経新聞社京都総局の秋山紀浩記者は、「多様な意見がある事象に着目し、多角的な視点の重要性に気付いた点がすばらしい」と話した。

このほか、表彰式には奨励賞を受賞した吉村直歩さん（宇都宮市立陽東小学校4年）、菊本万聖さん（横浜市立桜井小学校5年）らが出席した。

優秀学校賞受賞校

(15校)

- 秋田県 横手市立植田小学校
- 福島県 白河市立五箇小学校
- 栃木県 宇都宮市立豊郷中央小学校
- 東京都 足立区立花畑小学校
- 福岡県 北九州市立市丸小学校
- 岩手県 宮古市立花輪中学校
- 秋田県 横手市立十文字中学校
- 栃木県 宇都宮市立一条中学校
- 広島県 海田町立海田西中学校
- 福岡県 西南女学院中学校
- 茨城県 茨城県立水戸高等特別支援学校
- 山梨県 山梨県立山梨高等学校
- 愛知県 中京大学附属中京高等学校
- 福岡県 福岡県立小倉南高等学校
- 佐賀県 佐賀県立小城高等学校



秋山記者に意見を述べる影浦さん

第10回コンクールでは、新聞に触れる日常的な活動を含め、特に熱心に取り組んだ意欲的な学校に贈られる優秀学校賞に15校（小・中・高校各5校）が選ばれた。代表校として、宇都宮市立豊郷中央小学校の堀内多恵（ほりうちたえ）教諭が表彰式に出席した。同校は、異学年の縦割り班活動の一環として、昼休みを利用した「いっしょに読もう新聞タイム」に取り組んだ。下級生は上級生から文章の書き方を学び、上級

生は下級生に対する記事の紹介方法を工夫し、成果を上げた。

なお、最優秀賞ならびに優秀賞受賞者の作品の全文など第10回コンクルールの結果は、NIEウェブサイト（https://nie.jp/month/context_newspaper/2019/）に掲載している。



堀内教諭と小島委員長

第11回コンクール募集
 新聞協会は第11回「いっしょに読もう！新聞コンクール」の募集を始めました。対象は小・中・高校（高専）生です。2019年9月9日から20年9月8日までの新聞から興味を持った記事を選び、家族や友達と話し合い、気付いた意見を応募用紙に記入してお送りください。締め切りは9月9日（必着）です。
 応募要領はNIEウェブサイト（https://nie.jp/month/context_newspaper/2020/）をご覧ください。

新聞の「今」

米国で広がる「課題解決型報道」



共同通信社
経営企画室委員
尾崎 元

地域住民の生活に密着した課題の指摘にとどまらず、解決への道筋も調べて報じる「ソリューションジャーナリズム」の実践が米国で広がっている。日本では「課題解決型報道」などと訳されているが、米国でソリューションジャーナリズムを提唱し、実践しているジャーナリストたちを取材してみると、その訳語では捉えきれない広がりを持つ取り組みだという印象を受けた。

米東部フィラデルフィアで地元メディア連携組織の事務局長を務めるジーン・フリードマン・ルドフスキさんは「ソリューションジャーナリズムとは解決策を提示する記事を書くこと、最善の解決策はこれだと押しつけることと考える人もいるが、それは誤解だ」と話す。「効果的なアイデアを提起し、同じような問題に直面している人たちにモデルやアプローチを提供するのが目的だ」と言う。

同市のメディア連携組織はフィラデルフィア・インクワイアラー紙をはじめとするメディア20社などで構成されている。大きな課題である服役者の社会復帰や貧困の問題をソリューションジャーナリズムの手法を交え、協力して報じている。

同市では容疑者が釈放されても保釈金が7割しか返還されなかったが、米国の他地域の例と比較した報道がきっかけで全額戻るようになったり、貧困率の高い地域で短かった公共図書館の開館時間帯を延長させたりするなど、連携した報道は具体的な成果も上げている。

インクワイアラー紙のスタン・ウイシユナウスキ執行副社長（編集主幹）は「何がいいことをか知っているのは私たちで、それを書くというのが古いモデル。ソリューションジャーナリズムは逆で、私たちが頻繁に市民の話、アイデアを聞きに行く。彼らがジャーナリズムを助ける」と評価する。

メディア連携との親和性も高い。フリードマン・ルドフスキさんは「一つのメディアがある問題をとり上げて非難するのと比べ、複数のメディアが連携して

問題解決を目指す報道を展開すれば拡散の幅が広がり、より効果的になる」と強調した。

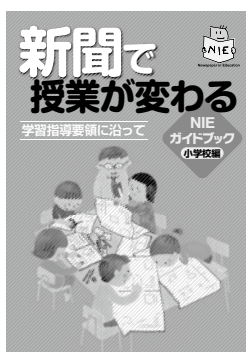
2013年にソリューションジャーナリズム・ネットワークを設立したティナ・ローゼンバークさんは「問題を掘り下げていくと、50マイル離れた市で具体的な解決策が見つかる。あんな町の問題には興味がないが、解決方法に関心がある。それを教えてくれ、という形でシェアされる。問題より解決策のほうに共有しやすい」と有用性を説く。

背景に強いメディア不信

ローゼンバークさんは「20年前に始めていたら、誰も注目しなかっただろう」とも言う。米国民のメディア不信、読者の新聞離れは深刻だ。経営危機に追い込まれて初めて、メディアは読者の信頼を失い、嫌われるようになった理由の一つが「悪い話、後ろ向きの話ばかり読まされてきている」ことだったと気付いた。ソリューションジャーナリズムは、そうした反感、嫌悪感に対するメディア側からの一つの回答でもある。

NIEガイドブック小学校編を刊行

新聞協会は、4月から新学習指導要領が小学校で実施されることを受け「新聞で授業が変わる 学習指導要領に沿って NIEガイドブック小学校編」を3月に刊行します。全国の実践経験豊かな教師が執筆し、新聞協会の関口修司NIEコーディネーターが監修し



ました。本ガイドブックは、NIEの実践経験の有無を問わず、先生方が気軽に授業で新聞を活用できる事例を、全教科・領域にわたり掲載しています。分かりや

すい授業計画と板書計画も盛り込みました。新学習指導要領がうたう、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、ぜひご活用ください。

A4判・56ページ。定価300円（税別・予定）です。購入をご希望の場合は新聞協会出版広報担当（03・3591・3469）までお問い合わせください。

NIE アドバイサー紹介

- ①学校名 ②担当教科 ③NIE 実践歴
④新聞を活用するうえでの工夫を一言

(敬称略)



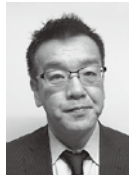
●青森県

大室 昌樹

(おおむろ・まさき)

- ①青森市立油川中学校
②社会科 ③11年
④社会の出来事に関心をも

たせ、教科書の学習内容が実社会とどのように結びついているのかを学ぶために、新聞を活用している。



●岩手県

中嶋 一良

(なかじま・かずよし)

- ①盛岡市立見前小学校
②小学校 ③8年
④新聞スクラップやミニ記

事作りに継続的に取り組むことで、読み取りや自分の考えの記述が素早くできるようになってきた。今後も継続していきたい。



●秋田県

小川 康

(おがわ・やすし)

- ①秋田県立大曲高等学校
②国語 ③8年
④学校は閉じられた空間だ

が、新聞という窓を開くことで社会を知ることができる。それは他者を知り、そして自分を知ることにつながる。



●群馬県

関野 利男

(せきの・としお)

- ①館林市立第八小学校
②小学校全科 ③6年
④新聞記事を活用するだけ

でなく、投稿などの形で発信していくことで、子供たちと新聞とのかかわりを強くしていきたい。



●徳島県

岩浅 牧

(いわさ・まき)

- ①阿南市立椿町中学校
②国語 ③10年
④「面白そう」「いつか使

えるかも」と思う記事をスクラップ。朝のNIEタイムを利用して、子供たちにそれを発信する。



●沖縄県

宮城 通就

(みやぎ・みちなり)

- ①沖縄県立辺土名高等学校
②地歴科 ③6年
④社会を俯瞰的に考えるこ

とができるツールが新聞である。NIEという手法を用いて「問いを立てる授業」づくりを心がけている。

NIE フラッシュニュース

◇NIE 全国大会 東京大会のスローガン決定 第26回大会は札幌市で開催 11月22(日)、23(月・祝)の両日に開催する第25回NIE全国大会東京大会のスローガンがこのほど、「ともに生きる 新聞でつながる」に決まりました。スローガンには、現代社会を象徴する「多様性の尊重」をメッセージとして込めています。大会初日は記念講演のほか、日本NIE学会との共同シンポジウムを行います。2日目は小中高校の実践発表等が行われます。大会情報は、NIEウェブサイトで(<https://nie.jp/>)で随時更新します。なお、第26回NIE全国大会は2021年8月5(木)、6(金)の両日、札幌市で開催することが決まりました。

表1 日本の平均得点

(単位:点)

	2009年	2018年
総合読解力の平均得点	520	504
新聞を読む	531	531
読まない	506	498

表2 「月に数回」「週に数回」読む本の種類・頻度

(単位:%)

	2009年	2018年
新聞	57.6	21.5
雑誌	64.5	30.8
コミック	72.4	54.9
フィクション	42.0	42.2
ノンフィクション	11.1	12.2

(注) いずれも2009年と2018年の国際結果報告書(国立教育政策研究所編)より作成

◇PISSA調査結果公表される 国立教育政策研究所は2019年12月、2018年に実施されたOECD生徒の学習到達度調査(PISA)の結果を公表しました(表1)。「新聞を読む」(月に数回以上)と答えた生徒の読解力の平均得点は531点で、「読まない」(月に1回以下)と答えた生徒よりも33点上回りました。しかし、新聞を読む生徒の割合は21・5%で、09年と比べて約36ポイント減りました。このほか、フィクションやノンフィクションを読む生徒の割合は09年に比べやや増えているものの、雑誌やコミックは大幅に少なくなりました(表2)。「ネット上でニュースを読む」「生活情報をネットで検索する」など、デジタルでの読みの活動を行う生徒の割合は09年から大きく増え、おり、読解力を取り巻く環境が変化していることが改めて浮き彫りになりました。



本校は2018年度より小規模特認校となった。特認校の特色ある教育活動として、国際的な視野および表現力の育成を掲げ、特に外国語（英語）教育に重点を置いている。ALTの常駐、オンライン英会話の実施、オーストラリアの小学校との交流事業等とともに、英字新聞を活用した取り組みを推進してきた。その一環として、PTAや地域の方々の協力も得て、全校児童で「イングリッシュマラソン」を実施した。

イングリッシュマラソンはポイントラリー形式とし、異年齢の縦割り班で校舎内の各教室に

事務局長から一言

建屋小学校はNIE実践指定校になった2018年度から、協議会の提案を受けて、イングリッシュマラソンに取り組んでいる。小学校で英語教育改革が進む中、手前みそだが、ゲームを通じて英語に親しめると児童にも教員にも評判は良いようだ。

設置された八つのブースをまわる。ブースの回り方は、各班で相談して決める。各班は、それぞれのブースで出される、英字新聞を活用した課題を克服しながら、ゴールを目指す。課題は、

例えば「1週間の記事を月曜日から日曜日の順番に並べ替え、曜日を英語で発音する」「裏返したシートから、同じ内容の記事を選ぶ神経衰弱」などである。本実践では、児童の英語に對

養父市立建屋小学校

たきのや

主幹教諭 坂本 和宏

◎兵庫県養父市／校長・池田 哲郎／児童数・44人
◎特色・本校は、兵庫県北部にある小規模校で、子供たちは元気で人なつっこく、違う学年の児童とも兄弟姉妹のように仲が良い。与えられた課題にまじめに取り組む一方、探究活動や、課題を自分で設定するような活動が苦手な面がある。保護者・地域の方々は本校の教育活動に協力的であり、さまざまな行事を協働して行っている。



「マッチングニュース」に挑戦



児童と「ニュースペーパーマン」(後列左)

する興味関心を深めること、異年齢集団が協力して課題を解決することにより、信頼関係を深め、より良い学校生活を築こうとする主体的な意欲を養うことを狙った。

子供たちからは、「難しかったけど、とても面白かった」「リーダーとして下級生を連れて回るのはとても難しかった」、地域の方からは「確実に子供たちの英語力が上がっている。リーダーが下の学年の子をまとめていて、とても頼もしかった」などの感想が寄せられた。

各ブースの内容は、夏季休業中、本校職員だけでなく、市内外の教職員および地域の方も加わった研修会で考えた。本実践は子供たちだけでなく私たち教職員も広い視野を得ることができた、大変有意義なものであったと実感している。

私のモットーは「楽しくなければNIEじゃない」。元気に英語を話す子供たちにまた会いに行きたい。(兵庫県NIE推進協議会事務局長・三好正文)



岡山市と倉敷市に挟まれた早島町に山陽新聞社の印刷工場「さん太しんぶん館」がある。輪転機3台を備え2018年5月に本格稼働。NIEの拠点として、新聞の役割などを学べるシアターや巨大壁画、学習施設を備える。岡山県内外の児童や家族連れを中心に、開館から2万人を超える見学者が来館している◆ガチャガチャを回して出た記事や写真を基に、新聞紙面を作るコーナーは大人気。子供たちは、目を輝かせながら写真を貼ったり見出しを考えたりする。見学後には「物事を正確に伝える大切さを実感」「裏取りする新聞の良さを再発見した」などと感想を話す◆市民による演奏会や作品展を実施、地域にも親しまれている。1月には、初のスマホ撮影教室を行い盛況だった。今後もさまざまなイベントやセミナーを企画して、愛されるNIE拠点を育てたい。(山陽新聞社・山本直樹)